

『都市の青少年問題』1958年10月（全国都市問題会議）

# 青少年活動の組織化と都市

矢口新

国立教育研究所所員

## 1

青少年活動というものについての人びとの一般的な考え方は、農村に発生しそこで伝統をもって育って来たいわゆる青年団活動がもとになってつくられて来ている。青少年活動というとき、その原型となるものは、青年団をもとにして考えられているのである。都市における青少年活動の問題を考えると常にそうである。例えば都市の青少年活動は活発でないといわれるが、それは実は農村の青年団活動のごときものがない、あるいはあってもそういう活動が不活発であるということである。また都市で青少年活動を組織化しようと考えるときも、その考え方は農村におけるごとき形態の青少年活動を組織化しようと考えるのである。もちろんこのようにいうと、都市の独自性を考えているという人もいるかも知れないが、しかし根本的には、やはり青少年活動というものが、農村的雰囲気と考えられているとあってよいのである。裏からいえば、都市の生活の独自性というものがそれほどはっきり意識されていないともいえるのである。あるいは都市生活の独自性をよほどはっきり考え、いままでの農村的青少年活動とまるでかわった形のものと考えようという考え方がなくてはならないともいえるのである。しかし青少年活動というとき、それは従来の青年団活動を土台としてつくられていて、その枠からぬけられない。そうして、知らず知らずの間に、都市の青少年活動もその枠の中で考えている。そうして結局、都市においては青少年活動は不活発だという結論に到達するのである。この際思い切って伝統的な青少年活動というものを打ち破って考えてみる必要がありはしないか。

## 2

農村の青年団活動の特色は、それが地縁団体であることだというようにいわれている。それは確かにそういう面もある。しかしもっと本質的にいうと、農村の青年団の地盤は単に地域にあるのではなく、その地域に住む人が同じ職能者であるということもまた大切な地盤なのである。その地域の人びとが同じ農業生活者であり、農業というものが、土地に結びついて営まれる性格のものであるということを基盤にして、地域の社会が特殊なまとまりをもって来ているのである。地域社会としての共同生活の営みが農村では強いというのはここから来ているのである。さまざまな社会的な行事も、社会的公共的な仕事といわれるものも、皆かれらが同じ農業を営む者であるところから来ているのである。そういうものを地盤にして、青年団も発生し、存立しているのである。青年団の活動や、さまざまな行事は、皆同じ職能者として、同じ地域に住む人びとの社会の活動や行事としての意味をもっている。いわば農業職能者の地域共同体が、その青少年を一人前に育てるための教育機関として青年団が存在しているのである。

さて、こういうものを基本にして、都市の青少年活動を考えようとしているのが、現在の欠点

なのである。都市の青少年活動をどうするか、その組織化をどうするかと考える時に、基本にあるのが、農村の青年団的青少年活動である。しかし都市は農村のような意味の同じ職能者の集った地域共同社会ではないというのが一般である。だから農村の地域青年団をもとにして都市の青少年活動を考えると、都市では極めて形式的な自然空間として地域が考えられてしまう。つまり自然空間としての地域の地盤で青少年活動を考えなければならなくなる。そうすると青少年活動の存在の地盤は極めて形式的な地域でしかない。もちろん都市にも地域的な社会としてのまとまりが全然ないというわけではない。けれどもそれはきわめて稀薄である。都市の地域を農村の部落位の範囲でとってみて比較してみるとよくわかる。農村の部落では皆同じ農業者であって、生活感情も、生活の態度も、生活の過程すべてが大体同様である。都市ではまったくそれが異っている。人間としてのというような抽象的なことではおなじであるが、その個々の家庭の属している産業は非常に異なり、その生活の形式もきわめて差異があり、生活感情、生活態度も大きく差がある。そういう所で、青少年に団体活動をさせて、その地域社会の一員として育てようという意欲が起って来ない方が当然であろう。そういう都市生活者は、地域よりも、むしろ職場に関心があり、おのれの子弟を職能者の中へ入れたいと考えるであろう。

もっともこの言い方は少し一般的すぎるのであって、都市生活者に関しては職能別にもっと詳しく考えてみなくてはならない。都市生活といってもさまざまなものがあるのでこれはむづかしいが、今ここでは、考え方に関する限りで述べておこう。都市生活者の中には、商業生活者もあれば工業生活者もある。また商業にも工業にも、その規模、形態のちがいがあって、それらが現実に人間の生活の仕方をかえている。また官庁や公共団体に働く、いわゆるホワイトカラーの人びともいる。そしてこれらの人びとが都市の地域では雑居しているのが常である。多少の地域的集団があるけれども、そういう職能がきわめてはっきりと地域的集団をなして生活しているところはない。例えば人口5千とか1万とかの地域をかぎってみると、そこには一部に商店街あり、工業労働者も生活しており、ホワイトカラーの人びとも居住しているといったことになっている。商店街を形成している商業生活者は、その地域では他の人びとよりは地域の共同生活に関心をもっているかも知れない。商店街として共同的な営みによって、それぞれの生活を発展させる条件も大きいからである。しかしそれらも、さらに立入ってみれば、それぞれ異った商品を扱い、異った経済関係の中にあるので、それらの人びとがまったくおなじ関心をもっているというわけに行

かない。商店街でないいわゆる住宅地区に住む人になれば、地域生活に対する関心はもっと稀薄なのが普通である。そこは消費生活の場所としていこいがあればよいのであって、近代的な合理的な考え方で、生活の条件が整備されさえすればよいのである。それは地方自治体の集める税金によって果されるのであるから、そういう方向へ関心がむくことはあっても、農村の部落のごとくに地域共同社会としての活動をするという方向へはむかない。その他の点では、都市生活をするこれらの人びとは、毎日の職場に関心がむいているであろうし、自己の子弟の教育に関してもそういう地盤で考える。一般に都市生活者は子弟の教育に熱心であるといわれるが、なかんずくホワイトカラーの人びとは熱心である。しかしそれは、地域共同社会の中で自己の子弟を育てようとするのではなく、むしろそこからはなれて学校教育の中へ入れて、いかなる所へ行っても生活しうような能力を得させようと考えている。その根本的関心は、地域でなく、産業というか、

職場というか、そういう方向にあるのである。

そういう所で、どうして、地域共同社会を地盤にして、青少年を活動させ、それによって青少年を教育しようなどという考え方が表面に出て来るはずがあるろうか。それは農村的共同社会の雰囲気を基本にして考えれば、いかにも利益社会的で、いけないことだという考え方が成り立つかも知れないが、しかし眼を開いてみれば、職能の中では、あるいは職場では、都市の地域にはない所の職域共同体的考え方もまたかなり強いのである。もとより職場もまた近代的合理的な形式があるから、共同社会的といっても農村のそれとはいちじるしく異っているが、しかし共同社会的雰囲気は少くとも地域社会よりは強いのである。

こうみて来ると、農村の地域青年团的な青少年活動の起る地盤は都市の生活では極めて乏しいということになるのではないか。

### 3

さらにもっとこの点を突込んで考えてみると、農村において、青少年の置かれている立場と、都市において青少年の置かれている立場には、根本的に差異がある。農業生活者の中で青少年は、それぞれの農業自営者の後継者である。それらの青少年が、その土地で将来自営者となり同じ地域で共同態を営んで行かなくてはならぬが故に、昔からそれらの青少年が若者組としてまとまって生活を営むことを要求されて来たのである。

農村にも、もとより後継者でない者がいる。それはいわゆる二三男といわれている者であるが、この二三男は最近青年団活動に参加しなくなって来ている。つまり二三男は、将来農業自営者として生活し得ないのであり、現に居住地は自己の生まれた農村に置いているが、付近の都市において働いているものも多い。そういう青少年は、その生活の形式からも、生活内容からも、さらにそれを土台にした生活態度、感情からも、農業者の団体である青年団には次第に関心をもたなくなりつつある。つまり農村が分化しつつあるに応じて、青少年もまた分化していくのである。都市生活の形態が農村の中へ入って来ているともいえよう。

都市における青少年達は、総じて、農村の自営者の後継者的な地位にあるのでなく、いずれも近代的な経済関係の中での雇用関係にある者たちである。あるいは少なくとも将来雇用関係に入る予想をもった青少年達である。もちろん商家の若旦那で農家の後継者のような地位にあたる者もいるけれども、そう多くはない。そしてまた都市で、青少年の活動というと案外にこの商店の若旦那の組織のごときものが多いのである。何々商店街青年会などというのは皆この若旦那たちである。あるいは何々同業組合青年会などというのも、同じ職業者なかまの若旦那のあつまりである。こういう青少年の集りが多いというのは、その地盤が同じ職業なかまで、そういう社会が共同社会的雰囲気をもっており、それが青少年のまとまりを要請しているところから来ている。つまりこの青少年活動の存立する地盤となる社会がいちじるしく農業自営者の共同社会に近いということであろう。

ところが、商店街であっても、同業者であってもそこに雇用関係で働いている者たちには、青少年活動は起って来ないのである。ここに一つの問題が見られるのであって、一般に近代の経済関係の中において雇用関係にある青少年達には、青少年の活動というのは起らない。少なくともいわゆる青年団活動というのは起らない。それは、青少年を雇用している社会が共同社会ではな

いということだといえればそれまでであるが、都市の青少年の組織化の問題は、実はこの点をどう考えるかにあるのである。

雇用関係として青少年を置いている社会は、青少年を育てるために、青少年を活動させることを考えないでよいのか、考えるべきでないのか、あるいは考えるべきなのか。考えないでよい、もしくは考えるべきでないとすれば、それから離れた所で青少年の組織的活動は考えられなければならないし、考えるべきだとすれば職能的な社会の中に青少年活動を組織化することを考えることができよう。都市の青少年の活動の問題はここまで考えて来ると、職能社会が青少年の育成をどう考えるかということにしばられて来るのでないか。

#### 4

こういうように問題がしばられて来るという点に関しては、もちろんいくつかの前段階の問題がある。青少年の団体活動というものを組織化する地盤は、都会の一部分の地域に限った場合のようなまとまりのない社会にはあり得ないのではないか。そういう地域では青少年を育てるといふ事は個々の家庭にまかされるのであって、その地域で青少年をまとめて団体活動をさせるといふ雰囲気は起って来ないのでないか。青少年に集団的な活動をさせる地盤となる社会そのものが集団として活動し得ないからである。こういう社会ではもっと広い地域社会の単位の中で、学校教育が各家庭の子弟の教育を受けもつのである。子弟を学校へやる家庭はそれ以上青少年の活動などということを考えない。そうすると学校へ行かない子弟、青少年が問題である。これはもう職場でその組織を考える以外手はないのではなからうか。

ところで都市には学校というようなより広い単位の地域で、青少年の活動を考える組織がある。例えばYMCA、YWCAといった形態の活動である。それは地域と関係なく、職場と関係ない活動の組織である。この活動組織は、ある意味では近代的である。農村の青年団的な青少年活動は全面的に個人をその団体に吸収しようとする。ところがYMCAのごとき活動は、ある一面においての個人たちの結合である。農村の青年団員は青年団員であることによって他の団体の成員とはなりにくいものをもっているのである。それは実際に青年団員が他の団体に入ることを禁止されているという意味ではない。どこへ入ろうと自由ということにはなっているが、しかし青年団というのは、その中にあらゆるクラブ活動を持ち、学習活動を持ち、もし他の団体にでも入ることになれば一応青年団の活動を否定する結果になり勝ちである。ところが都市では、ある一点を通じて青少年がクラブをつくるというような活動が行われる。例えばYMCAの何々クラブといったものである。それは自分の趣味の一点に関して団体活動に参加するのみでよい。個人はそれ以外に多くそういう会に参加することができる。この性格は農村的青少年活動とはやはり根本的なちがいをもっている。農村的青少年活動が生活共同体的な性格をもつものに対して、YMCAのような団体は文化的社交機関としての性格であるといえよう。文化社交機関的結合はやはり利益社会的性格をもっている。都市という生活体は、次第に多くの利益社会に細分化し、個人は同時にさまざまな利益社会に属し、それらが縦横に重なりあって、全体として複雑な都市生活体をつくるに至っている。その都市社会の中で個人を吸引する力の最も強いものは雇用関係をつくる社会であって、そこには次第に多くの文化的社交機関も付属するに至っている。しかし現在のところ、多くの青少年を包含する経営体といえども、その中にある青少年を教育したり、青少年の

活動を育成しようとは考えていない。

このように見て来ると、都市の青少年を組織することは、農村のように簡単に行かないことが明らかである。またその組織の仕方も全く別な方式によらなくてはならないことになる。すなわち経営体が、その属する青少年を職能的共同体の一員として育成するという立場から組織して活動せしめるように条件を整えるか、そうでなければ、YMCAの各種のクラブのごときものによって、いかなる職能に属するといかなる地域に属するとを問わず、青少年の自由な参加を求めて組織化することを考えるかである。

そこではいずれにしても農村の地域的職能的共同体としての青少年活動とは具体的な姿がいちじるしく異なるのである。しかし現在考えられる二つの形式の青少年活動の組織化の中、青少年の文化的社交機関としての団体活動はその発展に限界があるのである。こういう種類の活動を青少年が行うためには青少年自体にかなりの自由な生活、余暇というものがないとてならない。つまり近代的合理的な経済関係の中に入って生活していることが条件となるのである。ところが都市の青少年の中には、そうでない多くの青少年がいる。中小企業の中に入って生活している青少年はそういう自由な時間をもつような青少年達でないものが多い。商店の店員も多くそうであり、町工場の工員もそういう条件にあるものが多い。これらの青少年は余暇もなく、またみずからの興味関心をもとにしてなんらかの文化的な社交機関に入ろうとする考え方もないし、そういうセンスもない。これらの青少年は現在のところ全く放置されている。

これに反して、大企業や大工場、官庁などの近代的な組織の中に入って働く青少年は、恵まれた環境にあるといつてよいが、それらの青少年は概して、最初からそういう点では恵まれた生活を営んでいる者が多いのである。どちらかといえば、教育程度も高く、家庭的環境もそういう文化的な雰囲気をもっている。そうして自由な時間もち、活発にさまざまな文化的な社交機関に参加する。これらの青少年を組織して活動させることを考えなくとも、おのずから活動しているのである。

だから残るところは、やはり放置の状態にある中小企業の中の雇用関係にある青少年達ということになる。そして彼らを組織し、近代的な青少年活動を行わせて、新しい社会人として形成するには、経営体である職能団体が責任をもたなくてはならぬことになるのではないか。

## むすび

以上考察したところによって、都市の青少年活動を組織するには、青少年活動を存在せしめる地盤である共同体的理念を、どういう社会集団に求めるかということが問題となることが明らかである。都市は新しい生活集団であって、そこには、農村のような共同社会は存在しない。しかし都市生活には共同体的理念がなくともよいであろうか。都市は利益社会であると割り切ってしまうとよいであろうか。しかしそういう考え方では、実は青少年の活動を問題にするというような考え方は出て来ない。事実都市の青少年活動が不活発なのは、根本的にはそこにあるのである。こう考えると、都市青少年活動の問題は、都市生活をいかにして共同体的性格のものたらしめるかという問題となるのである。こういう根本問題に根ざしているということが、都市青少年の指導の問題の性格である。そうしてこういうところから解決して来なければ、最近やかましい都市青少年の不良化の問題、青少年の非行の問題も解決しないであろう。